「独眼竜政宗」伊達者らしい最後

仙台郷土研究会
副会長　逸見　英夫

昭和 49 年 10 月のことである。戦災で焼失した伊達政宗の墓所・瑞鳳殿を再建するために、建物の下の、遺体を納めてある石室を補強する必要が生じた。

蓋石がはずされると、石室内は一面に遺物で埋めつくされていた。その中に、元は鹿皮の袋に納められていたであろう、日本で最古の日時計兼磁気コンパスとともに、金製の携帯用ロザリオと、ブローチのような銀製服飾品がでてきた。

この２つの品物は、明らかに政宗の命で、スペイン、ローマに旅した家臣支倉常長によってもたらされたものである。石室の中の鎧櫃の上に置かれてあったものだが、生前の政宗が常に愛用したものと創造できる。

戦国時代の平均寿命は 30 歳代、織田信長は桶狭間の合戦前に人生「50 年」と謡ったといわれているが、70 歳で生涯を終えた。政宗は、ロザリオなどの品に、果たすことのできなかった海外との交流と天下人の夢をみていたのではなかろうか。

政宗は幼時天然痘を患い、右目を失明、独眼となったためか、健康には人一倍気を使った。

毎日自分で脈を取り、脈搏が「心ニアワヌ」と医者に診断させた。また毎朝、その日の体調に合わせた献立を指示した。水泳、魚釣りを好み、夏中水辺で過ごす。冬は薄着。線上での野宿に備えてのことだろう。

しかし、病には勝てなかった。寛永 11 年（1634）頃から、食欲不振と軽い嚥下困難の症状が現われてきた。次第に政宗も、近づく死期を自覚し始める。

寛永 13 年（1636）４月１８日、政宗の母義姫の菩提寺「保春院」の落慶式に参列。午後、ホトトギスの声を聞きたいと、仙台周辺の山々を散策した。経ヶ峰に立つと「心細キ御様子」で、連れの奥山大学に、死んだ後は、ここに埋めよと杖を立てた。現在の瑞鳳殿の所である。

同日 20 日仙台を発ち、28 日桜田門外の江戸藩邸に到着した。

５月 21 日午後、藩邸に将軍家光が見舞いに訪れた。政宗は朝と昼に行水を使い、威儀を正して将軍にお目見得した。夕方疲れ切って奥に入る。表と奥の寝所の間は、廊下で 54．5 間（約 100 メートル）。竹杖をつき手を引かれ何度も休む。お乗物かお車をと家臣がすすめても、「死ストモ弱キヲ見スル事口惜シキ次第ナリ」と答えるのみであった。

翌 22 日、張り出した腹は、乳の下で胴廻り、３尺８寸５分（約 1.17 メートル）。水さえ飲めぬ悔しさを訴える。白玉を芦管から入れると、「人ノ命ヲ養ウハ米ナリ。イカナル名医ノ薬ニモマス」と語りながら口にするが、のどに入らず苦しむ。

23 日夜更けに行水、髪を結い、衣装を改め床につく。

目を覚まして時刻を尋ねた。そして語る。「戦場ニ屍」をさらすものと思っていたが、病の床の上にある。いま天下に大乱起これば、子供らに戦いの作法を見せるのに、と刀に手を掛けながら涙を流した。戦国時代を才智の限りを尽くして生き抜いた武将は、病苦よりも病体を人目にさらす方が辛かったのだろう。肩から上と腰から下は痩せ衰えていたという。

朝から年若い女中たちの病室への入室を政宗は禁止している。妻愛姫や娘の見舞いすら拒み通し、死後は「ミダリニ人ヲ入レル事ナカレ」とも指示している。

明け方近くに目を覚まし、身を起こさせる。機嫌よく大小を腰に差し、２人に手を引かせて、10 間（約 18 メートル）の廊下を歩いて行き、小用をすませて部屋に戻る。足が動かなくなり「足ヨリ早ク弱ル」といいながら床に運ばせた。脇差を床の上に置き、西の方角に向かい、合掌すると倒れた。やがて目を見開き「やっ」と一声、息絶えた。寛永 13 年５月 24 日卯刻（午前６時）。“伊達者”の最後である。